

見る

385号

京都国立近代美術館ニュース 10・11月号 1999

隔月発行 第385号 平成11年10月1日 発行

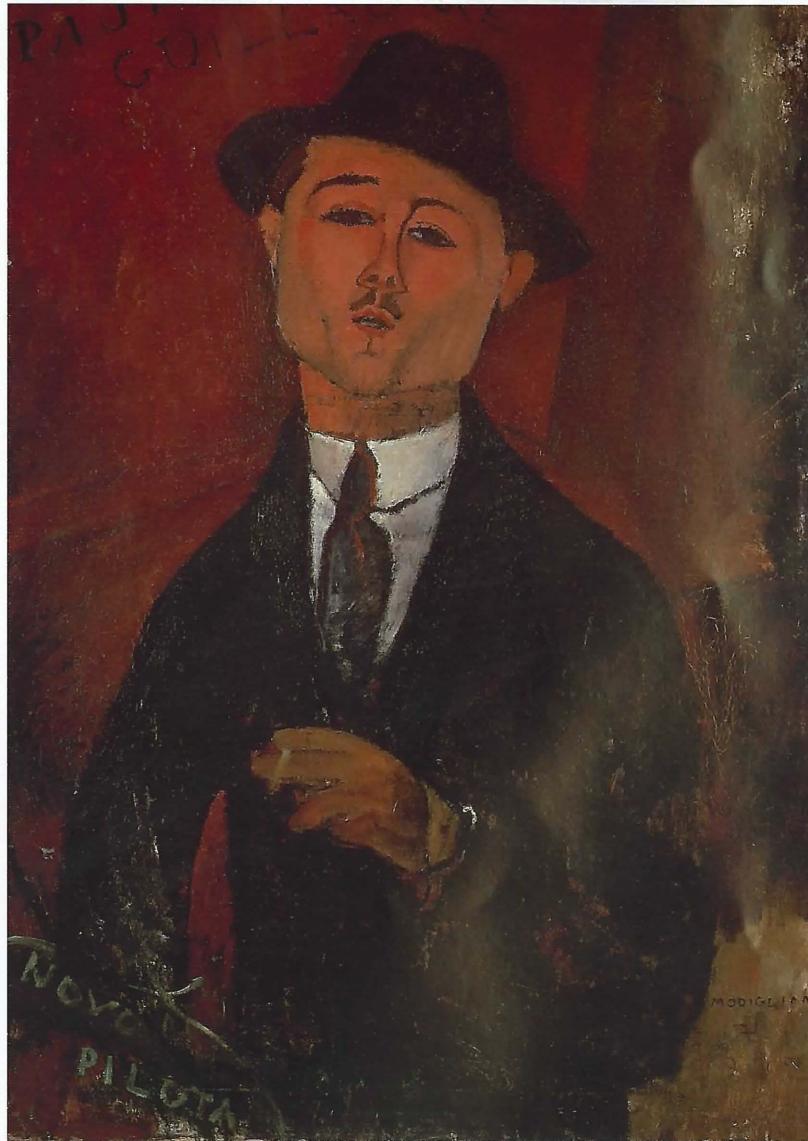
画商と画家—ポール・ギョームを描いた画家たち—／島田紀夫

ポール・ギョームとアフリカ美術

—オランジュリーのコレクションの裏に隠された、美術商兼蒐集家のもうひとつの顔—／稻賀繁美

吹田草牧『渡欧日記』(連載60)

8-2



ポール・ギョームとアフリカ美術

—オランジュリーのコレクションの裏に隠された、

美術商兼蒐集家のもうひとつの顔—

稻賀繁美

「黒人アフリカの美術に魅了される前から、ポール・ギョームは呪物の蒐集をし、また無名のままの芸術家たちに興味を示していた。モディリアーニやシャイム・ステインが有名となつたのは、ポール・ギョームに負うところが大きいといわれている。四五歳の若さで早世したかれは、あたかも「彗星」のように消え去つた」。

アンブロワーズ・ヴォラール『ある画商の回

想』より

今日オランジュリー美術館に収められているジャン・ヴァルテル&ポール・ギョーム・コレクションの主要な作品は、ポール・ギョーム（一八九一—一九三四）によって蒐集された。彼は、ドラン、ユトリロ、マリー・ローランサンらと密接な関係を持

面に焦点を絞つて、簡単に復習してみたい。

詩人にして前衛美術評論家のギョーム・アボリネール（一八八〇—一九一八）。彼は一

九〇九年以来、ハンガリー出身の彫刻家、ジョセフ・ブリュメールは、アルバート・バーンズ博士に売り出すことにも成功した。そのポール・ギョームの蒐集の沿革については、オランジュ



マリー・ローランサン 《ポール・ギョーム夫人の肖像》 1924年頃
© ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 1998

ナス近くのファルギエール街の一角で、ついで、サン・ジエルマン大通りにほど近い、ラスパイユ通り六番地で、エキゾティックな骨董の取引を始めていた。アボリネールの蒐集に先鞭を付けたのが、このブリュ

メールだつたらしい。詩人のお陰で、ある

日ブリュメールはガボンの彫刻を見つけることになる。場所は凱旋門の外れ、グラン

リー美術館館長、ピエール・ジヨルジエルによる充実した論文の抄訳が『パリ・オランジュリー美術館展』カタログに収められている。そもそも自動車修理工場の使用人から身を起こした、このポール・ギョームなる画商にして蒐集家。そのかれには、

しかしもうひとつの顔があつた。二〇世紀初頭から、パリではアフリカ美術が空前の流行を見る。その有力な立役者ないし舞台裏の仕掛け人のひとりこそ、ほかならぬこのポール・ギョームだった。以下、その側面に焦点を絞つて、簡単に復習してみたい。

ナス近くのファルギエール街の一角で、ついで、サン・ジエルマン大通りにほど近い、ラスパイユ通り六番地で、エキゾティックな骨董の取引を始めていた。アボリネールの蒐集に先鞭を付けたのが、このブリュ

メールだつたらしい。詩人のお陰で、ある日ブリュメールはガボンの彫刻を見つけることになる。場所は凱旋門の外れ、グラン

る。

美術史家のジャン・ロードは、筆者のパ

リ留学時代の恩師だが、かれはその博士論文『フランス絵画（一九〇五—一九一四年）

と黒人芸術』（一九六八）で、アリエカリマ

ルクーシ夫人の回想として、こんな逸話を伝えている。サクレ・クールの麓近く、モ

ンマルトルはブランシュ広場のカフェ・シリノで、マルクーシ夫人はアボリネールが

ピカソ、布拉ックらとおしゃべりをしている場に居合わせたことがある。その時誰だか知らないけれど、画家たちのテーブルの辺で、黙つて会話に耳を傾ける男がひとりいた。たまたま彼女の女中の息子もブラッタ・アフリカで兵役に従事していた。そん

なこともあってか、この男はほどなく、彼女の夫で画家のマルクーシやアボリネールに、アフリカの彫刻を持つてくるようになつた、という。

「フランスでは、本来なら、目利きの役割は憲法に従つて美術省が担当するはずなのだが、その役を実際に果たしているのは、ほかならぬ蒐集家と骨董漁りという種族だ。例えばギョーム氏のような芸術愛好者

—かれの名前は審美年鑑で流行に遅れをとるまいと欲するほどの人ならば、是非記憶しておくべきものなのだが——は、あのしばしば野蛮と呼ばれるアフリカやオセニアの人々の彫刻のみならず芸術作品一般

誌に書くのは一九一二年の一二月号でのこと。「未開の呪物」がすでに「今日の芸術」におおきな影響を及ぼしていることを確認するこの記事で、詩人はそのイニシアティヴがギヨームのような美術商、蒐集家によつて取られる一方、国家の側の対応が遅きに失していることを警告していた。トロカデロの博物館はもつぱら民族学蒐集の充実に傾注すべきであり、それとは別に、美的な観点から、アフリカの美術品は、別個の美術館に収められるべきだ、というのが、この記事での詩人の主張だった。

二年後の「黒人彫刻展」と題された一文（『パリ・ジユルナル』誌一九一四年七月二一日）でアポリネールは、「次ぎの季節には「パリの」重要な画廊で黒人彫刻の展覧会が催され」、それがアフリカ美術の「パリにおける聖別」となることを、期待を込めて語っていた。『ランシース・ヌデイエ』（美術批評家 アポリネール）によれば、ここで言外に示唆されているのは、むろんボーラル・ギヨームのことであり、当時かれは自分のミロメニル街の画廊で、現代美術をいつしょに「未開」美術を展示する構想を練つていた、といふ。第一次大戦勃発の影響——盟友アポリネールは頭部に戦傷を受け除隊、入院している——もあってか、この展覧会が実現するのは二年後の年末。一九一六年の一月から一二月にかけてのリール・エ・パレット画廊（この画廊は、一九一四年七月に、さる慈善団体の組織し

た「アフリカの追憶」と題する展覧会を実現しており、アポリネールとも懇意の関係にあつた）、さらには一九一七年一〇月に、フォーブール・サントノレに開設した、新しいボール・ギヨーム画廊が、そうした催しの舞台となつた。

時間は前後するが、そういうする間に、大西洋を隔てた新大陸のニューヨークでは、写真家アルフレッド・スティーヴンソンの盟友でもあつたマリウス・デ・ゼイヤスの手により、一九一四年の秋には既に『アフリカ原住民による木製彫像』近代美術の源流と名付けた展覧会が企画された。会場はフォート・セセッションのメッカ、五番街の二九一画廊。ボール・ギヨームはこれに一八点の作品を貸し出しているが、この時期すでに、一七世紀のものと称するコタの呪物などは、ふたつで三〇〇〇フランスという高騰ぶりだった、といふ。

こうした状況のなか、一九一六年の展覧会でピカソやモディリアーニの作品とともにアフリカの造形を展示して社交界の成功を収めたボール・ギヨームは、一九一七年三月には『黒人彫刻』と題するアルバムを編集出版する。作られた部数はたつたの七部だったが、そこにはアポリネールの注記とボール・ギヨームの跋に続いて、トロカデロの民族学博物館蔵のニンバ・バガをふくむギニアの作品、スレダン「実際にはマリ」、ガボン、コンゴ、さらにボリネシアからの四つの產品を含め、二五葉の写真が



パブロ・ピカソ《大きな静物画》 1917年
© SUCCESSION P. PICASSO, Paris & SPDA, Tokyo, 1998

収められている。アポリネールの所蔵品が含まれていた可能性もあるが、詩人は自分の名前が公にされることを望まなかつたようだ。実際「黒好みと黒狂い」と題して『マルキュール・ド・フランス』誌に一九一七年四月に掲載された時評で、アポリネールはボール・ギヨームによるアフリカ美術売り出しを揶揄し、「黒好み」や「黒狂い」に對していささか距離を取る姿勢を取つた。ギヨームほどには「黒人芸術」に入れあげていない画商たちからの反発を事前に警戒したもの、とも解釈されている。

とはいゝ、これは詩人が金銭商売とは一線を画した自分の立場を表明したものと、いってよく、むしろボール・ギヨームとの共同戦線が初期の目的を達するようにと、アポリネールは一九一八年一一月に亡くなるが、ボール・ギヨームが「第一回黒人芸術。オセアニア芸術展覧会」と銘づつた企画を、マレルブ街のドゥヴァンベ書店の画廊を舞台に実施するのは、翌年一九一九年の五月三〇日。「第一回」はむろん眉唾だが、前例を見ぬ成功を収めたことは否定しがたいようだ。目録にはアポリネールの一

詩人自ら「趣味ある永遠の部分」と呼んだエリートたちは思惑どおりに反応し、こうして「黒人美術」は時の流行となつてゆく。

『パリの諸芸術』誌はボール・ギヨームが一九一八年に創刊した高級美術雑誌だが、これが現代美術と並んで、黒人アフリカの造形を売り込む媒体として活用される。アポリネールはその最初の二号の編集に熱心に係わつており、伝記作家のなかには、アポリネール自身が、パラケルススとか、パスマン博士とか、ルイ・トロエムといった筆名を使って、かなりの部分を執筆したのではないか、と推定する向きもある。また

「黒好みと黒狂い」では、木製の呪物の時代測定はたいへん困難だ、といつた慎重な保留をつけていたはずの詩人は、ギヨームの雑誌の「文芸消息」欄では、編集者の見解に同意したものか、豹変する。同欄では、「考古学者のなかにはキリスト紀元よりもはるかに遡る時代設定を躊躇しない者もおり」もつとも古い呪物は、遙か古代から伝來したものである、といつた憶説まで憚らずに開陳されていたのだ。

アポリネールは一九一八年一一月に亡くなるが、ボール・ギヨームが「第一回黒人芸術。オセアニア芸術展覧会」と銘づつた企画を、マレルブ街のドゥヴァンベ書店の画廊を舞台に実施するのは、翌年一九一九年の五月三〇日。「第一回」はむろん眉唾だが、前例を見ぬ成功を収めたことは否定しがたいようだ。目録にはアポリネールの一



© ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 1998

九一七年の注記に続き、アンリ・クルゾとアンドレ・ルヴェルによる簡略な『野生芸術』が印刷されている。この一文はさらに敷延されて、一九一九年にはドゥヴァンベ書店から『黒人芸術とオセアニア芸術』として上梓され、民族学とは別個に、もつぱら美的にアフリカの造形を掲もうとする姿勢の嚆矢となるだろう。

ロバート・ゴールドワーターは『近代美術における未開主義』で、ギヨームらの業績に触れ、かれらは、黒人彫刻を、もつぱらそれが現代の最良の芸術と分かちもつ——と彼らが判断した——かの抽象的で幾何学的な構成ゆえにのみ評価した、と批判的に評定している。だが実際には、晩年、植民地省に入ったアポリネールは、一九一八年の『パリの諸芸術』誌の記事で、「超自然的性格を捨象する」ようなもつぱら審美的な観点はもはや時代遅れだとして、それら

の品々が「構想された時代や環境をより良く知ることが、その美をよりよく判断することを助ける」といった見解を示していた。また、アフリカの品々を、元来の文脈から切り離して美的に評価する「未開主義」の姿勢そのものも、典型的な植民地主義の姿勢として、近年あらためて批判されている。その価値判断はさておき、オランジュリーの蒐集の見えざる裏面として、これと同時代に「アフリカ美術」という概念の形成作業があつたことは、忘れてはならない。

最後に、ベル・エポックの貴公子として、成り上がり者ながらパリの社交界に君臨していたころの、ポール・ギヨームの生活ぶりを彷彿とさせる回想を、ひとつ引用しておこう。「ポール・ギヨームは不安にさせられる。かれの画廊に行くと、落ち度ない身なりの秘書に迎えられるが、冷淡で、ほどなく消え失せるほほ笑みとともに、彼はいつだってこう言うのがお決まりだった。『ギヨーム様はいま会見中で』。この儀式が終わると、訪問者の質に応じて塩梅された待ち時間の中に、儀礼係があなたを事務室へと招じ入れる。そこには安樂椅子に深々と収まつて、王侯然とした動作のポール・ギヨームが、葉巻を吹かして煙りの輪を作りながら、あなたに席を勧めるものだつた。(ピエール・レーブ『画界漫遊』一九四六年より)。

(国際日本文化研究センター助教授)

連載 (60)

近代美術資料

吹田草牧『渡欧日記』(続)

二月二十七日(火曜日) (前回からの続き)

牛肉の鉗焼たべた。それからまたメトロで

ひきかへす。重さんの部屋で久しぶりにや

うかんをたべる。里見君が来る。土田さん

が来る。土田さんと重さんとの間柄が険悪

なのではらはらした。やがて土田さんは石

崎、広田両氏を連れて帰つた。そのあとへ

国松氏が来る。いろいろとみなでイタリア

の話をする。重さんの、ジッシエルの

絵を見て、つくづく感心した。十一時半頃

石崎、広田両氏が帰つて来た。私は十二時

前に帰つた。帰つても、興奮して、中々眠

れない。一時過就寝。

二月二十八日(水曜日)

殆ど夢ばかり見づけて眠れなかつた。中々起きにくかつたが、九時半にやつと起

きられた。パンを買ってなかつたのでお粥

をたいてたべる。十時過から仕事にかか

る。頭がぼつとして何をする気にもなれな

い。少し塗つたただでひるになつた。大類

先生からエハガキが来た。用事が出来たの

と、出発が早くなつたので、大抵巴里へ

は寄れないとの事であつた。十二時半頃宿

を出る。出掛けに郵便が大分来て居たので

嬉しかつた。嫂と、杉山さんと、初枝さん

後仕事にかかつたが、頭が変で、気ばかり

いそいそとする。メトロでアカデミイへ行く。あのまづい自分の絵を見ると、かきつけられるのがいやになる。それに頭がぼんやりとして余程気が乗らなかつた。休み時間にぼつぼつ手紙をよむ。嫂からのに、保田の伯父さんと、米はんとが死んだことを報せて來た。驚いた。よんでも居る間に家がなつかしくつて、涙がこぼれさうになつた。四時にアカデミイを出る。今日はぶらぶらと歩いて、久しぶりにリュクサンブル公園を抜けて買つた。連翹の花が咲いて居た。エンヴエロオプを買つて帰る。帰つてから杉山さんとの初枝さんとの話を読んだ。緑さん、一岡さん、須磨さん、幸ちゃん、入江さん、多賀さん、山本花子さんの七人がそろつて洗礼を受けるのださうだ。杉山さんと、初枝さんとだけが洗礼を受けないさうだ。群衆心理に動かされて盲動しない二人をゑらいと思つた。初枝さんは水泳で極東選手権を得て居るから、来年五月の極東オリンピックに出場するのださうだ。六時過からサン・ミッシエルへ晚餐に行く。オペラへ行かうかと思ったが眠いのでやめて帰る。日記をかく。それから郵船会社へ八月二十六日の榛名丸の船室交換の手紙を出す。それから嫂へ手紙を書いた。とうとう十二時半までかかつてしまふ。

三月一日(木曜日)

昨夜はよく眠つたのだが、今朝は矢張起きにくかつた。九時半に起きる。朝餐